

「……！ やべっ」

土道が叫びを発した瞬間、『よしのん』が、ハッとした様子で振り向いてきた。顔を蒼白にして歯をカチカチと鳴らし、全身を小刻みに震わせ始める。

「……ひっ、い……っ」

そして、もう今にも泣き出してしまいそうな顔を作り、右手をバツと高く掲げる。

土道は心臓が掴まれるかのような錯覚に襲われた。

あの動作には覚えがある。昨日『よしのん』が、巨大な人形を顕現させた際のものだ。

「ちよ……っ、待て！ 落ち着け！」

だが、そんなことを言っても通じるはずがない。

琴里も『よしのん』の動きに気づいたのだろう。叫びを上げてくる。

『土道！ 今から間に合うとしたら——①よ！ 腹を見せて転がりなさい！』

「は——はあ……っ!？」

『早く!』

もう他にどうしようもない。

土道は傘をその場に投げ捨てると、雨に濡れた道の上に、ごろん、と寝転がった。

「参った！ 降参！」

「……っ!？」

瞬間、手を振り下ろしかけていた『よしのん』が、呆気にとられたような顔を作る。そして、恐る恐るといった調子で右手を元の位置に戻し、土道の様子を窺い始めた。

「……せ、成功……したのか？」

『——多分ね。刺激しないよう話しかけてみなさい』

言われて、土道は寝転がったまま、首だけをゆっくりと起こした。

「よ、よう……」

「……」

声をかけるも、『よしのん』は警戒するように睨んでくるだけだった。

「き、今日はどうしたんだ……?」

「……」

「す、すごい雨だよな……」

「……」

何も、言葉を返してこようとはしない。

「……どうしたもんかね、これは」

と、そこで土道は首を傾げた。

見間違いかもしれないのだが——今、『よしのん』の左手が見えた気がする。つまり、パペットを着けていない。

士道が不審そうに眉をひそめると同時、琴里から再度制止の声が響いた。

〈フラクシナス〉艦橋モニタに再び選択肢が、表示される。

① **ねばり強く話しかけながら歩み寄り、距離を詰めていく。**

② **一旦態勢を立て直すため、退却する。**

③ **パペットを着けていないことを訊いてみる。**

「ふむ……」

手元の小型ディスプレイに表示されたクルーたちの集計結果を眺め、琴里は小さくうなりを上げた。

もっとも多いのは、③。やはり皆、彼女がパペットを着けていないのが気になるようだ。確かに琴里としても確認しておきたい事項ではあった。

「士道、③よ。パペットをなくしてしまつて、探しているのかもしれないわ。とにかく何か反応が欲しいところだし、パペットのことを訊いてみなさい」

「……了解」

士道は小さく首肯すると、唇を開いた。

「なあ……おまえ、もしかして、パペットを探してたりする……のか？」

「……！」

士道が言った瞬間、『よしのん』がカッと目を見開いた。

そして士道の元にパタパタと走り寄ってきたかと思うと、頭をガツと掴み、問いつめるように揺さぶってくる。

「……っ！……っ!?!」

「あッ、あてててて……っ！ちよっ、止めろっつて」

言うど、『よしのん』がハツとしたように士道の頭から手を離れた。

士道は彼女の様子を窺うようにしながら身を起こすと、もう一度問いかけてみた。

「やっぱり……あれを探してるのか」

『よしのん』が、何度も力強くうなづく。

それから、不安そうな瞳を士道に向けてきた。まるで、パペットの所在を問うように。

「……っ、す、すまん。俺もどこにあるかは知らないんだ……」

士道が言うと、『よしのん』はこの世の終わりを告げられたかのような顔をして、その場

にへナへナとへたり込んだ。

そしてそのまま顔をうつむかせ、「うえ……っ、え……っ」と嗚咽を漏らし始める。  
「え、ええと……」

暴れられるのも困るけれど、こういうのも困る。士道はあたふたと視線を泳がせた。

『——落ち着きなさい、士道』

と、またも琴里の声が鼓膜に届いてくる。

『よしのん』の反応を受けて、三度画面にウインドウが展開される。

- ① 「そんな奴のこと、俺が忘れさせてやるぜ」頼れる男をアピール。
- ② 「俺も一緒に、パペットを探してやるよ！」優しい男をアピール。
- ③ 「実は俺がパペットだったんだ！」ユーモアセンス溢れる男をアピール。

「総員、選択！」

琴里の号令とともに、小型ディスプレイに集計結果が表示される。

もっとも多いのは②、それに次いで①。③には一票しか入っていなかった。

「まあ、②が無難でしょうね。……ていうか③なんて選んだの誰よ」

「……駄目でしょうか」

後方から、神無月のしよぼくれた声が響いてきた。

「……………」

琴里は無視してマイクをたぐり寄せた。

「士道、彼女と一緒にパペットを探してあげなさい」

後方から「ああッ、放置プレイというのなかなか……っ！」なんて声が聞こえてきたが、それも無視した。

「あ、あのだな、よしのん」

「……………」

士道が声を上げると、『よしのん』はまたもビクッと身体を震わせた。

そして彼女がバツと手を振りかぶると、辺りにできた水たまりが隆起し、弾丸のようになつて士道の座っている場所のすぐ近くに炸裂した。

「の……のわッ!?!」

思わず、身をすくませる。

「す、すまんッ！ 驚かすつもりはなかったんだ！」

こちらの様子を窺うように、油断なく視線を送ってくる（……わりには、目が合うと視

線を逸らそうとする『よしのん』に、姿勢を直して小さく頭を下げる。

そして無抵抗を示すように両手を上げながら、言葉が続けた。

「その……も、もしよかったら……お、俺も、パペットを探すの手伝おうか？」

「……！」

士道が言うと、『よしのん』が驚いたように目を見開いた。

そして数秒のあと、初めて顔を明るくし、うんうんと力強く首を縦に振ってくる。

士道は「よし」と息を吐くと、ようやく濡れた地面から腰を上げた。

随分と濡れてしまったが、まあ、今は気にするまい。

「ええと……それで、なんだけど。パペットは、いつどこでなくしちゃったんだ？」

問うと、『よしのん』は逡巡するように視線を泳がせてから、その桜色の唇を開いた。

「……き、のう……！」

そして、ウサギの耳付きフードをきゅっと握って顔をうつむけ、目元を隠すようにしながらたどたどしく言ってくる。

「こわい……人たち、攻撃……され……気づいたら……、いなく、なっ……！」

「ええと……？ 昨日、ASTに襲われたのか」

士道が言うと、『よしのん』は「くんと首を縦に倒した。

「なるほど、あのあとか……！」

士道は言いながら、首を左右に回して辺りの様子を見取った。

崩落した建物や、ヒビの入った道路が、視界いっぱい広がっている。これは骨が折れそうだった。

と、それに合わせるようにして、右耳に〈フラクシナス〉からの音声が届く。

『「こっちからもカメラがあるだけ送るわ。できるだけ彼女とコミュニケーションを取りながら捜索をしてちょうだい」』

士道は了解を示すようにインカムを小突くと、再び『よしのん』に目をやった。

「よし……じゃあ、探すか、よしのん」

「……！」

『よしのん』が首肯し——しばし口をモゴモゴさせてから、声を発してくる。

「わ、たし……は、」

「え？」

「私……は、よしのん、じゃなくて……四糸乃。よしのんは……私の、友だち……！」

「四糸乃……？」

士道が問い返すように名を呼ぶと、少女——四糸乃が走っていかうとする。

「あ……ちよつと！」

と、その声に驚いたのだろうか、または四糸乃が肩を震わせる。

瞬間、四糸乃の周囲の雨が突然、針のようになって土道の方に飛んできた。

「うわああッ!？」

慌ててその場にうつぶせになり、どうにかそれを避ける。

数が少なかったからいいようなものの、これが広域に放たれていたなら、今頃土道の身体はサボテンのようになっていただろう。

「お、落ち着いて！ 俺だ、俺！」

四糸乃はビクビクしながら振り向くと、土道の顔を見て小さく息を吐いた。

土道は恐る恐ると言った調子で立ち上がると、

「よ、よかったらこれ。……もう濡れてっかもしれねえけど、ないよりはマシだろ？」

先ほど道端に放った傘を拾い、四糸乃に差し出した。

「？ ？ ？」

「ああ、これはこうするんだ」

不思議そうに首を傾げる四糸乃の手に傘を握らせ、差しやる。

すると、雨粒が自分の身体に触れなくなったことに驚いたのか、四糸乃が目を丸くして

頭上を見やった。

透明なビニール傘に当たって雨粒が弾け、きらきらと光りながら落ちていく。

「……………!……………!」

四糸乃が興奮気味に、傘を持っていない方の手をパタパタと動かした。

「お、おう、気に入ったか。使え使え！」

と、土道が言うと、四糸乃が土道に問いかけるように目を向けてきた。

「あ……？ 俺？」

四糸乃が、こくこくとうなずく。

「ああ、俺は大丈夫だよ。いいから使えって」

四糸乃はしばしの間逡巡するように傘と土道を交互に見たのち、

「あ……り、が……う……」

ぺこりとお辞儀をしてから、パペットの搜索に戻っていった。

『格好いいことしちゃって』

右耳に、からかうような琴里の声が聞こえてくる。

「う、うるせ」

『——まあ、精霊がその気になったなら、濡れた服なんてすぐ乾かせるでしょうけどね。』

「とうかそれ以前に、不可視の皮膜を張って雨を弾くなんて造作もないことだし」  
「そ、そうなのか？」

「……まあ、そこは別の問題である。小さな女の子が雨に濡れているのを見るのは、どうにも忍びなかった。」

土道は雨に濡れた顔を軽く拭うと、搜索を開始した。

「『続きはファンタジア文庫』『データ・ア・ライブ2』で…」

(c)2011 Koushi Tachibana